



手斧梵論

江戸中期の俳人菊岡沾涼の『本朝俗諺志』には、手斧梵論という妖怪とも妖精とも幻ともつかないものが紹介されています。これは大工道具の手斧に形や大きさが似ており、ふらふらと空中をさまようだけで害はなく、見物に訪れる旅人もあったとか。

「上総国鳴戸村願性寺禪宗此寺に毎夜てうのぼると云もの出る大さかたちともに大工道具の手斧の柄にちかはさるもの鳥むしなどの飛ことくふらりふらりと飛めぐり人の目のうへ鼻の先をしづかに行かふ也手ちかく来るを取らんとするにひらりと横へきれうへにあがり中ゝとる事あたわすたゝかけろふに似たりむかしよりありて何ゆへといふをしらす少も仇をなす事なし雨夜はわけてはやく出る也此地へ始ての旅人寺のてふのほろ見んとて夜はなしなどに行ほると云はかけろうなどの類ひこにあると見れば惣空中にわしる普化和尚などの類ひみな梵論也」

ちなみに、手斧(鉋)は湾曲した柄の先



上下二層の道路橋となっている現在の仲の瀬橋(宮城県仙台市青葉区)

に発行された『仙台市史 第6巻 (別篇 第4)』からご紹介しましょう。

「西公園の下から広瀬川を川内へ越える大工橋を二夜橋といった。嘉祥2年(849)8月のこと、飛驒工匠が奥州へ来た時、雨のため広瀬川の水かさが増して、向こう岸にわたることが出来なかった。それで、水がひくまで待つのも面倒だといって、一夜のうちに橋を架けて渡ったという」

ここで語られる大工橋は、慶長6年(1601)の仙台開府から6、70年後に初めて架橋されたようで、飛驒匠が架けたというのはあくまで伝説です。ちなみに元禄7年(1694)には、「仲の瀬橋」と改名され、昭和56年(1981)には上下二層の道路橋として架け替えられて、今に至っています。

セルキー (Selkie)

セルキーはスコットランドの妖精で、普



セルキー(当館職員 上原由子画)

建設の幻獣2 手斧梵論ほか

に鉄製の刃がついている大工道具で、原木に近い材木の表面を削って滑らかにするために使用されます。その歴史は古く、弥生時代後期にはすでに存在していたと推定されています。また、大工の仕事始めには、この道具の名を冠した「手斧始」という神事が行われており、とても重んじられた道具だったことがわかります。

また、梵論については、『本朝俗諺志』の末尾に蛸蛉(かげろう)のことで、普化和尚(虚無僧)も梵論という説明されています。

飛驒匠

飛驒匠とは、奈良・平安時代に徴用された木工技術者のことです。これは律令制の租(米)・庸(労役もしくは布・調(特産物))として知られる徴税のうち、庸と調を免ずる代わりに都で1年間働かせるという全国唯一の特殊な制度に基づきました。

都に上った彼らの仕事は、一般的な木工や木挽、運搬などで、いわゆる大工職ではなく、夏季以外は休日もない過酷な

労働を強いられました。

このような飛驒匠の制度が成立した理由の一つとして、飛驒の人々は蝦夷と見なされていた可能性があります。例えば「飛驒」という国号ですが、蝦夷を表す「ヒナ」と同義だったという説があります。また、逃亡する者が多く、その捕縛命令に「飛驒匠は言語や容貌が他国のものと異なるから、名前を変えてもわかる」と書かれており、風俗や身体特徴が都周辺の人々とは異なっていたようです。

ところで、飛驒匠が名工であるという伝説は、『今昔物語』を皮切りに平安後期あたりから発生してきます。『今昔物語』では、「飛驒ノ工」が、有名な実在の絵師である百済川成と技くらべをするという話があり、「飛驒ノ工がつくった四面すべてに入口をつけた四四方の堂に、百済川成が入ろうとすると自動的に入口の戸が閉まってしまい、どの方向から入ることも出来なかった」といい、尋常ならざる工匠として描かれています。

くだって江戸時代の文化5年(1808)には、SF大活劇ともいえるべ

れ?鍛冶屋、パン屋、蠟燭職人の3人なの?なぜ?...

おわかりになりますか?ヒントは傍線部分「ある晩」です。実は、これは英語の綴り遊びなので、日本語ではわかりにくいのですが、種明かしをしましょう。実は「ある晩」(one night)ではなく、「ひとりの騎士」(one knight)とどうオチで、3人ではなく、4人だったというなぞなぞでした。

ミノタウロス (Minotaur) の迷宮

太陽神の娘であるパーシパエーは、クレタ島クノッソスのミノース王の妃でしたが、ボセイドンがミノース王に贈った美しい雄牛に恋心を抱きました。パーシパエーは、工匠ダイダロスに雌牛の張りばてを作らせ、その中に入って雄牛に近づき思いを遂げ、そうして生まれたのが牛頭人身の怪物ミノタウロスです。

ミノタウロスは、恐ろしく残酷な性格だったため、迷宮(ラビュリントス)に閉じ込められました。この迷宮は、やはり工匠ダイダロスが造ったもので、中に入った者は案内人なしに出口を見つけることはできないよう設計されていました。

ミノタウロスは9年ごとに少年7人、少女7人の生贄を必要としたため、アテーナイの英雄テーセウスに討たれることになりました。

テーセウスの英雄譚は早くも紀元前5世紀には古代ギリシア作家のバッキュリデースの手によって記されているとW・H・マシューズの『迷宮と迷路の文化史』にあります。



ミノタウロス(当館職員 上原由子画)

ベネゼ (Bénézet)

フランス南部のアヴィニオンにある橋は、ローヌ川がバルトラス島によって分岐する場所に架けられています。石橋であり、石造部分は1250年頃に建てられていますが、木造基礎部分はそれよりもずっと古い可能性があるそうです。

ジョーデイス・デュブレの『世界の橋の秘密ヒストリア』によれば、この橋の建設には次のような言い伝えがあります。

「1178年、アヴィニオンで皆既日食が起こった。おびえた人々は市場に集まり、そこで司教は人々に言葉をかけていた。すると、若い羊飼いのベネゼが、日食は橋を架けよという神からのお告げだと言った。証拠を求める司教に対して、ベネゼは巨大な石を持ち上げ、橋を架ける場所まで運んで行った。彼は橋の建設を任せられ、この奇跡をもとにカトリック教会はその後ベネゼを聖人と認めた。彼の架けた橋は、サンベネゼ橋としても知られている」(つづく)

(文: 江口知秀)

